

修士論文研究ノート カントの観念論批判に関する研究

著者	栗原 拓也
雑誌名	筑波哲学
号	21
ページ	46-49
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00121542

【修士論文研究ノート】

カントの観念論批判に関する研究

栗原 拓也

はじめに

第一章 前批判期から『純粹理性の批判』へ

第一節 『就任論文』

第二節 「ヘルツ宛書簡」

第三節 「コペルニクスの転回」

第二章 「第四誤謬推理」の位置づけと意義

第一節 「第四誤謬推理」

第二節 『プロレゴメナ』

第三章 「観念論論駁」

第一節 『純粹理性の批判』第二版「序言」注

第二節 「観念論論駁」

(1) 「前書き」

(2) 「定理」と「証明」

(3) 「観念論論駁」における観念論批判

おわりに——カントと〈もの〉自体そのもの

『純粹理性の批判』において、カントは観念論を二回にわたって批判している。第一版における「第四誤謬推理」と第二版における「観念論論駁」がそれである。どちらも観念論の批判を主題としていることはその叙述から明らかであるが、そこでカントがいかにして観念論を批判しているのかということは、それほど明確ではない。たとえば、「外的対象（物体）は単に現象にすぎない、したがってまた私たちの表象の一種にほかならない」（A370）という「第四誤謬推理」の一節は、一見すると観念論と同じ主張をしているようにも思われる。それでは「第四誤謬推理」と

「観念論論駁」は、いかにして、いかなる意味で観念論を批判しているのだろうか——この問いに答えることが、本論文の目的である。

まず第一章では、カントの問題意識を探るために前批判期と『純粋理性の批判』におけるカントの思想を比較する。1770年の『可感界と可想界の形式と原理』において、カントは知性的認識を認めている。知性的認識とは、実在を「あるがまま」に知る認識であり、それゆえに「実在と関わる」という意味での実在性を有する。これはつまり<もの>自体そのものを知る認識であり、そのことから当時のカントが理性主義者であったことが分かる。理性主義とは、経験主義に対して、必然性や普遍性を持つ認識などのまったく経験に依存しない認識にも、思考の必然性をメルクマールとして実在性を認める立場である。

しかし、そうした知性的認識の可能性が、1772年の「ヘルツ宛書簡」において問われることになる。すなわち、「ひとが私たちのうちにあって表象と呼んでいるものの対象への関係は、いかなる根拠に基づくのか」(X.130)という「演繹」の問題が生じるのである。とりわけ「ヘルツ宛書簡」では、経験に依存しない認識がいかにして対象に関わりうるのかが問われている。というのも、そうした認識に実在性を認められなければ、私たちは経験主義に陥るしかないからである。カントはこのときはじめて、因果律が主観的妥当性を有するにすぎないというヒュームの批判を深刻に受け止めたのではないか。

「演繹」の問題を解決するために、『純粋理性の批判』においてカントは「コペルニクスの転回」に至った。その核心は、それによらなければ対象が私たちに現れることができない「制約」は、まさにそのために現象としての対象に対して必然的に一致するという点にある。カントはこの必然的な一致をもって、「表象が対象と関係する」ことを説明する。このように、表象と対象の関係、つまり認識（とくにア・プリオリな認識）の実在性こそが『純粋理性の批判』を貫くモチーフなのである。『純粋理性の批判』において観念論が問題とされるのも、それが認識の客観的妥当性を否定するからにほかならず、こうしたカントの問題意識を無視して「第四誤謬推理」や「観念論論駁」を理解することはできない。

第二章は、「第四誤謬推理」がいかなる観念論批判であるのかを明らかにする。「第四誤謬推理」は外的現象を内的表象に還元したのだと簡潔に理解されることがあるが、そのような理解ではカントと観念論（経験的観念論）の違いは明確にならない。

「第四誤謬推理」においてカントは、観念論が想定している「<もの>自体そのものとしてあるのでなければ、外的対象ではない」という前提を誤りだと断じる。なぜなら、この前提に立つかぎり、私たちの認識は対象と対応するのか疑わしいままにとどまり、認識に実在性を認めることができないからである。認識の実在性を問題にしてきたカントにとって、この点こそが観念論の批判されるべき難点であった。

このような観念論に対して、確かにカントは外的現象を内的表象に還元したとは言えるが、同時に「私たちの外的直観には空間における何か或る現実的なものが対応している」(A375)とも述べているのである。つまり、カントは外的対象についての認識に実在性を認める。それは、第一章で確認した「コペルニクスの転回」の核心、すなわち「経験の可能性の制約」の一つである空間によって可能になったと考えられる。

第二章の考察は、「第四誤謬推理」におけるカントの問題意識が外的対象の認識の実在性にあり、それが「コペルニクスの転回」によって説明されていることを明らかにした。それゆえに本論文は、「演繹」の問題に解答を与える「コペルニクスの転回」の帰結の一つとして、「第四誤謬推理」を『純粹理性の批判』第一版のうちに位置づける。そして、認識と対象の一致という観点からなされた観念論批判として、ひいてはそうした観念論に至る経験主義への批判として、「第四誤謬推理」に意義を認めるのである。

第三章は、これまで多様に解釈されてきた「観念論論駁」について論じる。「観念論論駁」は、「私たちの内的経験でさえ、外的経験の前提のもとでのみ可能である」(B275)という命題を証明することによって、観念論を論駁しようとする。私たちは「私は時間のうちに在る」という仕方で自らを経験的に意識するが、これが内的経験である。しかし、内的経験のためには時間規定を可能にする「制約」として、持続的なものが必要になるとカントは言う。「経験の類推」の「第一類推」によれば、時間規定のために必要となるこの持続的なものは、あくまでも私たちに知覚されるものでなければならず、それゆえに<もの>自体そのものではなく、現象であることが分かる。「観念論論駁」では、その持続的なものが私のうちにはないことが示され、内的経験のためには、この持続的なものを認識する外的経験を前提しなければならぬとされる。

ところで、この持続的なものは「経験を可能にする制約」とも言われる。そのよ

うな「制約」は、それを欠いては認識が可能ではないがゆえに、必然的に客観的妥当性を持つのであった。それゆえ外的経験は、内的経験があるときには必然的に客観的実在性を持つことになるだろう。「観念論論駁」の観念論に対する反論の核心は、この点にあると考えられる。というのも、このことによって外的対象についての認識の実在性が示されるからである。内的経験は外的経験の前提のもとでのみ可能であるとする「観念論論駁」の観念論批判は、「第四誤謬推理」に比べてより根本的な批判になっているように思われる。

以上の考察によって本論文は、「第四誤謬推理」と「観念論論駁」はいかなる観念論批判なのかという問いに解答を与える。両者はいずれも「ヘルツ宛書簡」で示された認識と対象の一致という問題意識のもとにあり、経験を可能にするア・プリオリな「制約」に着目するという点で、「コペルニクス的転回」を経た批判期のカントであればこそ可能な批判であったと結論できるだろう。従来の研究は、この二つの観念論批判が〈もの〉自体そのものとしての外的対象の存在を証明していなければ、観念論に対する批判にならないと考えてきたように思われる。しかしながら、〈もの〉自体そのものについては語らず、現象について語るからこそ、カントは私たちの認識の実在性を保証することができたのである。批判期に至る動機となった「演繹」という問題意識を考慮するならば、カントの観念論批判は本論文が示したように理解されなければならない。

(くりはら・たくや 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学)